

「西澤曠野夫人の墓碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
与野〇五	山口氏墓表	青山以中	樺嶋孝継	青山以中

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
窪世祥	一八二七・文政十	本町東	長伝寺	

一. はじめに

本石碑は、西澤曠野の夫人の墓碑である。

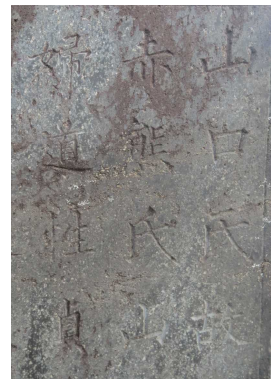
○写真1 墓碑正面



○写真2 題額



○写真3 「碑記」部分



二. 翻刻並に訳注

■ 翻刻

(正面)

◎ 題額

山口氏墓表

(背面)

◎ 碑記

山口氏故西澤曠野先生之配也父諱某武州上尾驛人母赤熊氏山口氏自歸先生其事舅姑及先生孝養聽從一執婦道性貞靜寡言雖家人未嘗見喜愠之色家素饒財及其累罹災產業不得如初而處之晏如凡憂喜苦樂与先生偕之終始如一先生性耆酒沒後日薦酒于靈位事之如在又巧于女紅至老不少廢昔年余自東都歸路過其家時猶無恙贈余浴衣一領此其汚手製也嗟山口氏之於婦德可謂無愧矣文政十年丁亥十月十九日没享年七十九生男女數人長子光孝子典皆与余親善其餘詳于先人汚撰先生碑文

久留米 樺嶋孝繼謹撰
福山 青山以中謹書
男 西澤謙泣血建之
窪世祥鐫

*異体字など

- 養 養。 ○嘗 嘗。 ○災 災。 ○處 處。 ○汚 所。 ○夷 亥。
- 享 享。 ○留 留。 ○謙 謙。

■ 訳注

◎ 碑記

● 本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

山口氏、故西澤曠野先生之配也。

父諱某、武州上尾驛人。

母赤熊氏。

山口氏自歸先生、其事舅姑及先生、孝養聽從一執婦道。

性貞靜寡言、雖家人未嘗見喜愠之色。

家素饒財、及其累罹災、產業不得如初。

而處之、晏如。

凡憂喜苦樂、與先生偕之、終始如一。

先生性耆酒。

沒後日薦酒于靈位、事之如在。

又巧于女紅、至老不少廢。

昔年、余自東都歸路、過其家。時猶無恙。

贈余浴衣一領、此其所手製也。

嗟、山口氏之於婦德、可謂無愧矣。

文政十年丁亥十月十九日、沒。

享年七十九。

生男女數人。

長子光孝、子典、皆與余親善。

其餘、詳于先人所撰先生碑文。

久留米、樺嶋孝繼謹撰。

福山、青山以中謹書。

男西澤謙、泣血建之。

窪世祥鐫。

● 訓詁

山口氏は、故西澤曠野先生の配なり。

父諱は某、武州上尾驛の人。

母は赤熊氏。

山口氏 先生に歸とつぎてより、其の舅姑及び先生に事ふること、孝養聽從一に婦道を執る。

性 貞靜寡言にして、家人と雖も未だ嘗て喜愠の色を見ず。

家は素と饒財なるも、其の災に罹るを累ぬるに及び、産業初めの如きを得ず。

而して之に處ること、晏如たり。

凡そ憂喜苦樂、先生と之を偕にし、終始一のごとし。

先生 性酒を耆む。

沒後、日に酒を靈位に薦め、之に事ふることいま在すがごとくす。

又た女紅に巧みにして、老いに至るも少しも廢せず。

昔年、余東都よりの歸路、其の家を過よぎる。時に猶ほ恙つが無し。

余に浴衣一領を贈る、此れ其の手づから製するところなり。

嗟あゝ、山口氏の婦德におけるや、愧づる無しと謂ふべし。

文政十年丁亥十月十九日、沒す。

享年七十九。

男女數人を生む。

長子光孝、子典、皆な余と親善たり。

其餘は、先人撰するところの先生の碑文に詳つまびらかなり。

久留米の、樺嶋孝繼謹みて撰す。

福山の、青山以中謹みて書す。

男西澤謙、泣血して之を建つ。

窪世祥鑄す。

●人物

○山口氏 西澤曠野の夫人。寛延二（一七四九）年から文政十（一八二七）年。墓は長伝寺の西澤家墓域にあり、樺嶋孝継の墓碑銘が彫られている。

○西澤曠野翁 寛保三（一七四三）年から文政四（一八二二）年。諱は周、字は子邦、通称万次、西澤家当主としての通称儀右衛門。折衷学派の細井平洲に学んだが、郷里の与野に帰り、名主としての務めを果たす傍ら、地域の教育にも力を入れ、「孝経」の講読などを通して郷人を感化した。また天明の飢饉では資材をなげうって救済にあたるなど、地域振興にもつとめた。与野の俳人鈴木莊丹（一七三二～一八一五）や久下戸村（現川越市）の儒者奥貫友山（一七〇八～一七八七）などとも交遊があった。芳野金陵に「西澤愚公傳」がある（「金陵遺稿」所収）。

○光孝 西澤謙。明和四（一七六七）年から嘉永四（一八五二）年。字は子光、号は蘭陵、西澤家当主としての通称儀右衛門。曠野の長男。父同様、細井平洲に師事した。特に詩に勝っていたという。墓は長伝寺の西澤家墓域にある（墓碑「与野〇六」）。

○子典 西澤常。天明七（一七八七）年から安政五（一八五八）年。字は子典、号は淵斎。昆氏の養子となり、昆家としての通称泰仲。細井平洲、樺嶋石梁に学んだが、のち医術に転じた。芳野金陵に「昆子典墓碣銘」（「金陵遺稿」巻六）がある。

○樺嶋孝継 安永五（一七七六）年から天保五（一八三四）年。久留米藩士樺嶋石梁の兄三右衛門の次男で、石梁家の養嗣子となった。よく家業を継ぎ、文政十一年家督を相続し、藩校明善堂教授助、御使番格などに任ぜられた（「久留米人物誌」）。

○青山以中 生卒年不詳。名は大二郎。備後福山藩士。同じく福山藩士小島成斎（一七九七～一八六二）の門下で書を学んだ。「安政文雅人名録」に「書」として掲載されていることから、安政年間（一八五四～一八六〇）には能書家として知られていたことが分かる。本郷丸山の阿部家江戸屋敷にあった江戸丸山誠之館の教授として書や学問を教えた。

○窪世祥 生没年不詳。正しくは、大窪世祥で、名前は世昌、また世升とも書いた。江戸後期の石碑の石工。嘉津山『江戸前の石工 窪世祥』（第一書房、二〇一六）によれば、その作品は、文化元（一八〇四）年から安政元（一八五四）年のものが確認されるという。大窪行（号詩仏）と巻大任の揮毫、及びその門下の揮毫を雋刻する際に、窪世昌が用いられていることが多いという。

●注

○配 妻。

○孝養 親によく仕え孝行を尽くすこと。

○貞静 貞淑。婦女が節操を堅く守り、しとやかなさま。

○家人 家族。

○慍 怒る。

○色 顔色、様子。

○饒 豊か、富む。

○産業 財産。

○晏如 落ち着いているさま。

- 靈位 位牌。
- 在 生前。
- 女紅 女工。女の手仕事。織物や裁縫など。
- 無恙 無事である。
- 領 衣服や夜具を数える助数詞。
- 享年七十九 逆算すると、生年は、寛延二（一七四九）年。
- 先人 亡父。樺嶋石梁。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【出自】

山口氏は、故西澤曠野先生の配偶者である。
父の諱は不明だが、武蔵の国上尾駅の人である。
母は赤熊氏。

【孝行】

山口氏は、曠野先生に嫁いだから、舅姑と夫の先生によくお仕えして孝行を尽くすこと、夫と両親の言葉を聞いてそれに従うことにおいて、婦道をしっかりと執るものであった。

【貞淑】

性質として、貞淑で寡言で、家族であっても誰も山口氏が喜んだり怒ったり、感情をあらわにするところを見たことがなかった。

（あるいは「家族に対してすら、喜びや怒りを表すことが無かった」）

【内助の功】

曠野の家は、もとは裕福であったが、火災に罹ることが度重なり、初めのように財産が豊か、ということができなくなってきた。

しかし山口氏は、そうした状況に少しも心を動かさず、落ち着いているのであった。

心配や喜び、苦しみや楽しみ、なにごとにもわたっても、先生とそれらをともし、生涯変わらなかった。

【夫の死後も仕える】

先生は、お酒が大好きで、よく嗜んでいた。そこで、先生の没後は、生前と同じように、まるで先生が生きているかのように、毎日位牌にお酒をお供えするのだった。

【女工】

山口氏は、また織物裁縫に長けていて、歳をとっても少しもやめなかった。

昔、私が江戸から久留米に帰郷する帰路に、先生の家を訪ねたことがあった。当時、山口氏はなお健在であった。

そのとき山口氏は、私に浴衣を一枚贈ってくれたが、それは山口氏ご自身でお作りになったものであった。

【婦徳】

ああ、山口氏は、以上のように「婦徳」という点において、全く恥ずるところのない方であった。

【逝去】

文政十年丁亥十月十九日、逝去した。享年七十九歳であった。

【家族】

山口氏は、男女数人の子どもを生んだ。

長男の光孝君と四男の子典君は、私と友善の關係にある。

その他の子たちについては、亡父樺嶋石梁が撰した曠野先生の碑文に詳しく書いてある。

【記事】

久留米の樺嶋孝継が謹んで撰した。

福山の青山以中が謹んで書した。

息子の西澤謙が、血の涙を流しながらこの碑を建てた。

窪世祥が鐫刻した。

三. 資料

(一) 「新編武蔵風土記稿」(文化三十(一八三〇)年) 卷一五五 足立郡之二十一

● 與野領

◎ 與野町・寺院

○ 長傳寺

「淨土宗、江戸増上寺末、貞樹山觀智院と號す、古は御朱印地なりしが、後故ありて収公せられしと云、開山は普光觀智國師なれど、それより以前草創ありし古刹を中興せしなるべしと云、本尊は彌陀の立像長三尺許、作は定朝とも或は運慶とも云、内佛の本尊は三尊の彌陀長一尺三寸許、恵心の作なり、又愛染の像あり、長五寸許、運慶の作なり、佛前に葵御紋を彫たる木地の香爐一箇あり、公より御寄附のものなりと云ふ」

(二) 「武蔵国郡村誌」(明治十五(一八八二)年) 卷之十

◎ 與野町・仏寺

○ 長傳寺

「縦四十八間横四十六間面積六百二十四坪町の北端にあり淨土宗東京芝増上寺の末派たり(以下「風土記稿」)」

四. 主な参考資料

① 翻刻

なし

② 論文など

・ 渡邊刀水「西澤曠野と其子孫」『埼玉史談』(四ノ五、一九三三)、『渡辺刀水集』四(青裳堂書店、一九八九)所収。

③ 関連碑文

・ 「西澤曠野の墓碑」(「与野〇四」)

・ 「西澤蘭陵の墓碑」(「与野〇六」)

・ 「史蹟西澤曠野先生墓所碑」(「与野〇七」)

* 本稿作成にあたり、ふくやま書道美術館より、情報と資料の提供を受けた。

以上

二〇二四年三月 薄井俊二訳す